

風姿花伝第二、物学条々

女

凡、女懸かり、若き為手の
嗜みに似合ふ事なり。さり
ながら、これ一大事なり。
先づ、扮装見苦しければ、更
に見所なし。

女御更衣なんどの似せ事
は、容易くその御振る舞い

女御や更衣などの高貴な婦人に扮する事は、容易にさうした上臍の御挙動を見る事はないから、これは十分に伺

見る事無ければ、
能々よく

伺ふべし。
衣袴の着様、

総て私ならず、尋べし。

唯世の常の女懸かりは、常

小袖の扮装、
大方の体、
可

しくとある迄なり。
舞ひまで。

白拍子、又は物狂ひなど

の女懸かり、扇にてもあれ、

かざしにてもあれ（原註..はなのえ

たなんと也)、
如何にもく弱々

と、
持定めずして持つべし。
もちさだ

衣袴きぬはかまなどをも長々と踏み

世間普通の女の風体は、常に見なれてゐる事だから、それに扮する事は実際容易であらう。ただ、衣小袖きぬこそでのいでたち、大体の姿など、相當に風趣があればよい。曲舞や白拍子、又は物狂ひなどの女に扮するには、扇でも、かざしでも、いかにも弱々と、持つか持たぬかわからぬ位に、しなやかに持つが良い。着物や袴なども、長々とふくよかに、足のかくれる程に着け、腰膝はかがまぬやうに、そして身体全体はしなやかでなくてはならない。顔の持ちやうは、仰向き加減でみると容貌が悪く見え、又俯向いては、後姿が見にくく見えない。又なるだけ袖の長い着物を着るやうにして、手先をも見せないやうにしなくてはいけない。

含みて、腰膝は直に、身は

嬌やかなるべし。貌の持ち

様、仰けば見目悪く見ゆ、

俯けば後ろ姿悪し。さて、

首持ちを強く持てば、女に

似ず、如何にもく袖の長

き物を着て、手先をも見す

べからず。

されば、扮装を嗜めとは、

懸かりを良く見せむと也。

いづれの物真似なりとも、

扮装悪くては能かるべきか

なれども、殊更、女懸かり、

扮装を以て本とす。

かやうなわけで、いでたちを十分に嗜み研究せよといふのは、結局その風姿風情を良く見せようが為である。如何なる物真似でも、いでたちが悪くては良い筈はないのだが、特別に女体の風姿は、いでたちといふことを以て根本とするものである。

この段より以下は、物真似に関する細説で、先づ女体物真似の注意をのべて居る。物真似といふ内容には、二方面が考へられる。一は身体の扮装、身のこなしなどで、その者に似せること。二は、その者の行動動作を真似ることである。ここでは、主として第一について論じて居るが、物真似の根本は勿論この第一である。花鏡に、「先能其物成、後能其態似」を説いて居る所と、合せ見るべきであらう。

女体に於ては、「女らしく出でたつ」ことが第一要件である。それは現実の女体の種々相を十分に研究的に観察し知悉しなければならぬ。又、自分等が見ることの出来ぬ高貴な女性については、それを聞き尋ね、服装等も故実に合するやうにつとむべきであると教へてゐる。

其他女体の特色として、持ち物の持ち定めやうの強からぬこと、手先や足を見せぬこと、顔の持ちやう、頸の工合、身体のすらりとしたしなやかさなどへの注意を見ると、女らしく出で立つ事に対し、如何に細心の注意をはらつて居るかがうかがはれると思ふ。更に、これを後

年の二曲三体絵図に於ける女体の心得と比較して見ると、「女体、体心捨力。心を体にして、力を捨つるあてがひ、よくよく心得すべし。物真似の第一大事是にあり。幽玄の根本風とも申すべきなり。返す返す心体を忘るべからず」とあつて、花伝書が、外面的扮装姿体を中心として居るに比べて、女体風姿の根本的な心得をのべて居る事を見る。両者合せ見る時に、世阿弥時代の女体風姿への要求が那辺にあつたかを知り得ると思ふ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次 著